



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学農学部附属植物園・博物館の来園者層調査報告と展示評価
Author(s)	加藤, 克; 長野, 純子
Citation	北海道大学農学部博物館研究紀要, 1, 58-80
Issue Date	2001-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32807
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_p58-80.pdf



北海道大学農学部附属植物園・博物館の来園者層調査報告と展示評価

加藤 克・長野 純子

はじめに.

本報告は、平成 12 年度北海道大学農学部博物館の夏季開館期間に実施した来館者層調査の結果を報告し、その結果を元に現時点における博物館の展示・解説評価を行うものである。あわせて、平成 12 年度北海道大学農学部附属植物園（以下北大植物園と略す）冬季開館施設である温室における来館者層調査の経過も報告する。

北大植物園・博物館は国立大学の教育研究機関としての役割を担っていると同時に、大学の社会に対する窓口としての活動、加えて博物館相当施設としての社会教育活動も行っている。当施設は、これまで一般の来園・来館者の視点を重視していたとはいえないが、教育研究機関としての役割を重視するスタンス¹をとっているためであって、それ自体は否定されるべきことではない。しかしながら、平成 11 年度より博物館北方民族資料室前に設置した来館者用のノートには"展示内容についてもっと詳しく知りたい"、"解説文を増やしてほしい"という意見が記入されており、一般来館者の学習に対する強い意欲を感じることができる。この意欲に対し、博物館相当施設としての役割を併せ持つ植物園・博物館は何らかの対応をしなければならないであろうし、また大学の施設としても社会に対しての教育機関としての責任を果たすことが求められている状況にもある。このような状況で、たとえ機関として大幅な変更ができなくとも、展示や維持管理に関わる者の努力で改善できることを怠るべきではないものとする。そこで、まず現在の展示・解説の伝達効果および教育施設としての機能が植物園・博物館を訪れる人々に対し適当なものであるか、問題はないかを検討することにし、その前提として来館者層の調査を行うこととした。

以下、調査結果を整理し、その結果に基づいて展示評価を行う。夏期来館者層調査およびデータ処理、博物館の展示評価については加藤が、冬季植物園入園者層調査およびデータ処理は長野が担当する²。

1 来館者層調査方法

〈調査場所〉北海道大学農学部博物館北方民族資料室入口（植物園管理棟 2 階）

〈調査期間〉平成 12 年 4 月 29 日～11 月 3 日（植物園夏季開園期間）

〈調査方法〉入口前の机にアンケート用紙を設置し入館者の自由意志に任せてチェックしてもらう

〈調査項目〉性別・年齢層・居住地・来園回数・来園目的の 5 項目

〈調査における問題点〉

調査場所が植物園管理棟 2 階北方民族資料室前であることは、植物園来園者全体に対しての調査とはいえない。植物園を目的に訪れた人の意見を反映していない可能性があると同時に、北方民族資料室を目的に訪れた人の意見は大きくなると思われる。植物園入園者に対する博物館施設への入館者数であるが、平成 12 年 8 月および 9 月に学芸員実習生とともに調査を行った。結果は次のとおりである。

表1 植物園入園者数に対する博物館施設入室者数

調査日	植物園 総入園者数	北方民族資料室		博物館本館	
		入室数	%	入館数	%
8月24日	548	209	38.14	279	50.91
9月7日	488	209	42.83	248	50.82

屋内にある博物館は天候によっても入館者は変化するものと思われ、わずか2日の結果で判断を下すことは危険であるが、調査場所を訪れる入園者が半数にも満たないことから、今回の調査結果を植物園全体にあてはめることは問題がある。

北方民族資料室の展示は、常設のものであり、展示替が頻繁に行われているわけではない。そのため、以前に訪れたことのある人は調査場所である北方民族資料室に足を運ばない可能性がある。

集計上の問題として、回答者一人に対して1行の回答欄を作成したが、家族連れなどが1行に複数名分の回答をしていることがまま見受けられた。可能な限りデータを吸い上げるべく、集計操作を行ったため"不明"の数値が増えている部分がある。集計操作は次のように行った。

資料1 アンケート用紙への回答の一例

日付	性別		年齢					
	男性	女性	～10	11-18	19-25	26-40	41-60	61～
	○	○		○		○	○	

この回答例の場合、集計数は下記ようになる

性別:男性1名、女性1名、不明1名、

年齢:11-18:1名、26-40:1名、41-60:1名

他の問題は数値評価の際にも指摘するが、今回の調査の目的は統計そのものではなく、自己評価・点検の材料を入手するものであり、来館者の傾向を読み取ることができれば十分であると考え、考察を進めたい。

2 調査結果

2-1 入園者数と回答数

表2 入館者数と調査数

(調査日数)	植物園 入園者数	回答数	回答率 (%)
4月(2)	2368	82	3.46
5月(26)	15578	528	3.39
6月(26)	15666	530	3.38
7月(26)	13321	509	3.82
8月(27)	14273	613	4.30
9月(26)	9995	454	4.54
10月(26)	9724	400	4.11
11月(3)	976	35	3.59
総計	81901	3151	3.85

1日単位で入園者に対する回答数を考えると、1%に満たない日もあれば15%以上になる日もあるが、月別で見た場合、およそ3～4%になることがわかる。極端な増減はなく、1年を通じた傾向としてみることは可能であろう。

なお、8月から数値が上昇している理由としては、アンケートを設置した机に椅子を1脚追加し、2脚にしたことが挙げられる。椅子が1脚しかない場合、二人連れの来館者は回答しようとする人を待たせなければならなかったが、1脚増えたことで待ち時間に併置してある来館者用ノートを閲覧したり、記入したりすることが可能になったため回答意欲が増したものと思われた。

2-2 男女比（図 1・2）

特徴的なのは 4 月の女性の比率が高いということであろう。4 月の開園日はわずか 2 日に過ぎず、このデータの精度は高いとはいえないが、4 月 29 日（無料入園日）に多くの女性が訪れているということは間違いなさそうである³。他の月については特徴を見出しえない⁴。

2-3 年齢構成（図 3・4）

年齢構成は図 3・4 のようになる。年齢区分の設定意図は、植物園が観光スポットとしての役割を果たしていると仮定し、その場合来園者の動向は学校や会社の休暇期間に顕著に表れると考えられるので、休暇時期が共通となるような年齢区分を設定した。

表 3 年齢区分

年齢区分（才）	略称（層）	対象、想定される年齢層
～10	A	小学生（中学年まで）
11～18	B	小学生(高学年)・中学・高校生
19～25	C	大学生層
26～40	D	社会人（学校に通う子どものいない年齢層を想定）
41～60	E	社会人（学校に通う子どものいる年齢層を想定）
61～	F	熟年層（子どもが独立する年齢層を想定）

来園者の中心は 40～50 才代（E 層）というところである⁵が、調査結果を月別で比較すると興味深い傾向が浮かび上がる。

【4 月】

F 層の割合が非常に高い。無料開園日に訪れる人は熟年・高齢者が多いことを示しているものと思われる。

【5 月】

A 層が年平均よりもやや高く、B 層がやや低いことを除き、ほとんどの区分で年平均と変わらない数値になる。ゴールデンウィークに家族連れ、友人同士で訪れる来園者が多くなるためだと思われる。

【7 月】

D 層が急激に増加し 8 月になると急激に落ち込む傾向がある。これは小中学生の子どもをもつ層ではないため、夏期休暇の混雑を避ける目的で早めに動いているためだと考えられる。

【8 月】

中高生を中心とする B 層は夏休みにあたるため急激に増え、それ以外はほぼ横ばいである。小学生以下が構成する A 層、大学生が構成する C 層も増加傾向にある。これも夏期休暇の影響であり、納得できる結果である。

【9 月】

8 月に急激に減少した D 層と大学生の C 層が急激に増加する。D 層は 7 月にみたように混雑を避けて来園しているものと予想される。大学生もその多くは夏期休暇中であり、それを利用しているものと考えられる。

【10 月】

C 層（大学生）の減少と E・F 層の増加が目につくが、大学の後期授業の開始に伴う減少と紅葉シーズンに高年齢層が来園する傾向があるものと考えられる。

【11月】

回答数が少なく、団体で来園した小学生の回答により A 層の割合が大きくなっている。有効な数値とはいいい難く、継続調査を行う必要がある。

以上の結果から、入園者の年齢構成はそれぞれの休暇時期に深く関係していると考えられ、先の観光のための施設であるという仮定が裏付けられる。

2-4 居住地（図 5・6）

来園者の居住地は明らかな傾向が出た。図 5 からわかるように 3 分の 2 が道外からの旅行者であった。特に、8、9 月には 75% 以上が道外からの来園者である。5 月に道内（市外）居住者が微増しているのはゴールデンウィークに訪れる人々が多いためである⁶。市内居住者の多くが 4 月の無料開園を見越して集中して来園していることを考えると、観光目的でなければ現在の植物園・博物館は入園料に見合った内容でない、あるいは内容に見合った入園料の設定をしていないことを示している可能性がある⁷。

2-5 来園回数（図 7・8）

来園回数も明らかな傾向が出ている。不明者を回答数から除去すると 84% が初めての来園ということになる⁸。4 月は来園経験がある人が 4 割近くを占め、無料入園を見越した来園者が多数いることを示している。

2-6 来園目的（図 9・10）

来園目的は図 9・10 のようになっている⁹。先に植物園・博物館を観光施設と仮定したが、それを裏付ける結果といえよう。4 月は 7 割以上が植物園を目的に訪れているが、これはこれまでも見たように無料入園を見越した来園者の傾向であり、紅葉シーズンの近く秋季も植物園を目的に訪れる割合が多いようである。それ以外は観光として"植物園"、"博物館"を訪れており、何が展示されているのか、どのような目的で活動しているのかなど、基本的な情報を持たないで訪れている人が多いものと思われる。

2-7 展示・解説評価の対象となる来館者層

以上の調査結果検証から、博物館の展示および解説を評価するにあたっての対象となる来館者層はどのようなものになるであろうか。

性別についてはあまり考慮する必要はないと思われる。年齢についても来館層は傾向として 40 才以上の割合が多いが、展示および解説内容は全ての来園者を対象とするものであり、特定の年齢層を対象とするものではない¹⁰。

重要と思われる点は、来館者の多くが道外からの観光客であり、過去に来館経験がないということである。このグループに分類される来館者の多くは、北海道の自然・歴史に対する知識が不足しているものと思われ、その不足分を補うような展示や解説がなされているかを注意する必要がある。彼らの多くは、きらびやかな花が咲き乱れる植物園や迫力ある展示物を求めて来館しているのかもしれないが、植物園・博物館にはそのような希望に応えられるだけの資料は有していない。この点については、当施設は研究機関としての大学の付属施設であり、その果たすべき役割を達成してこそ、その存在意義があるというこれまでの姿勢を維持すべきである。今回の自己評価の姿勢としては、大学の果たしている一必ずしもきらびやかではないが重要な一役割を社会に対して適切に発表・説明できているかに注目し、更に学習意欲のある来館者に応えることができるものであるか、勉強を目的とせず観光目的で訪れた人々をも自らの目的に引き込むような展示・解説がなされているかを評価するという考え方をすべきと考える。

- ・北海道の自然・歴史・文化を知らない人にも理解できるように作成されているか
- ・大学の施設としての位置付け、施設が果たすべき役割が認識されるような展示・解説がなされているか

展示評価の上で重視する点は以上の2点とし、次章以降で博物館の展示評価を行う。展示評価は、本来外部から行われるべきものであり、博物館スタッフである加藤が行うことは妥当ではないかもしれない。しかし、加藤は1999年に博物館に赴任したばかりであり、現在の展示の企画などにはまったく関与しておらず、(内情を多少理解してはいるが)外部の存在としての批評が可能と考える。今後の展示改善・展示の充実のために積極的に評価・批判を行いたい。

3 博物館本館展示・解説の評価

北大農学部博物館における展示のねらいは、展示の計画書などが現在残されていないので、当時のスタッフがどのように考えていたかは定かではないが1.エゾオオカミや考古学資料、開拓使に関する資料を通じて北海道の歴史、風土などを伝える、2.ブラキストン標本を通じて北海道を中心とした動物相の分布を伝える、3.植物園内の鳥を中心として北海道の鳥類に関する知識を伝える、4.学内外の研究者に資料を提供し、それによって得られた結果を一般に普及する、という4点であると考えている。

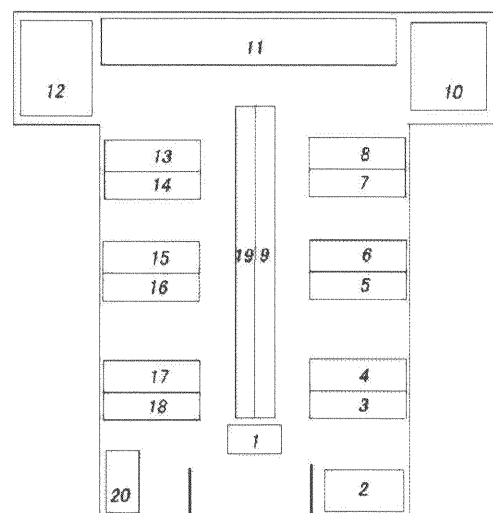
博物館が以上のねらいを来館者に伝えようとする理由は、開拓使によって設立された博物館が、その当時の建物のまま現在に引き継がれ、絶滅したエゾオオカミの住む北海道の様子、御雇い外国人の残した足跡などが資料として保存されているからに他ならない。また古くから資料保存やその体系化を目指していたことで貴重な資料が保存され、それらが現在の研究に生かされていることを広く理解してもらうことも一つの理由として挙げられる。博物館そのものが重要文化財に指定され、明治～昭和初期の展示様式の復元を求められた中で、上記のねらいに必要な資料を展示していることは評価できるが、そのねらいが来館者に対して適切に伝達されているか、少なくとも適切に伝達されるような環境が整っているかどうかは別の問題である。

伝達方法は入口付近のリーフレットと展示ケース内の解説によるものである。この両者について評価してみたい。

リーフレットには博物館の歴史、建築様式、展示資料の概要が記されているのみであり、どの展示スペースで何を伝えたいのか、博物館が来館者に何を伝えたいと考えているのか、に関する記載はない。加えて、来館者の多くは入口正面に立ちはだかるヒグマの剥製に注意を向けてしまい、リーフレットは退館時に持ち帰る状況である。これではリーフレットに博物館の伝えたいこと、あるいはそれに関する基本的事項を明記したとしても展示資料との連携は全く取れていないことになる。北海道の歴史、開拓の歴史、博物館の歴史を学ぶことなく展示資料を見た場合、展示のねらいを伝えることができるであろうか。

展示ケース内の解説はリーフレットが果たしえない役割を果たしているといえるだろうか。北海道の歴史・風土を表現する展示ケース(1,2,18,20)¹¹は図にみるように博物館入口の両側にあり、多くの来館者はヒグマ(1)・エ

ゾオオカミ(2)を見た後、動物相の分布(5・7)、南極犬のタロ(11)、北海道の鳥類(13・16)の展示を見てから、再び北海道の考古資料(18)および開拓期の資料(20)を見ることになる。この時間差を埋める展示解説がなされていれば開拓期の動物と和人ととの間に生



じた軋轢、北海道独特の土器を通じてその地理的環境・風土などについて学ぶことができるはずである。しかしながら解説は全て展示資料に関するもの、あるいは土器文化の説明という個別のグループに関するものがあるに過ぎない。北海道の開拓の歴史に詳しい来館者であれば資料の持つ意味を読み取ることができるかもしれないが、そうでなければ単なる動物・土器・地図としての意味しかもち得ないと思われる。現時点ではたとえ展示ケースがまとまっていたとしてもそのねらいを十分に伝えられるような解説がなされているとはいえない。

ブラキストン資料は当館の所蔵する貴重な資料群の一つであり、これを用いて北海道を中心とした動物の分布相について表現しようと試みられている。本州（5）～ブラキストン線と八田線（6）～北海道（7）～サハリンの動物（8）の資料が展示され、それぞれのケースにはそれぞれの動物相の解説がなされている。これらの展示はブラキストン線の重要性を理解している来館者にとっては非常に有益かもしれない。しかし来館者の動線を検討してみると、多くは本州の動物（5）～キツネの毛皮標本（9）～ブラキストン線に関する解説（6）～北海道の動物（7）～ミンクなどの毛皮標本（5）～タロの剥製（11）～サハリンの動物（8）という順路で見学していることがわかる。動物相の分布の展示に合わせた誘導や解説がなされていなければ歴史・風土の展示と同様に個別の資料を陳列しているのと同じで変わらない。この展示についても来館者に適した展示と評価することはできない。

北海道および植物園内で見られる鳥類の展示は展示数も多く、北海道外からの来館者には好評である。これは本剥製の迫力ある展示から得られるものであるが、博物館の収蔵鳥類標本の多くは仮剥製である。博物館＝本剥製というイメージを持った来館者に対して、仮剥製という研究目的の剥製の存在を知らしめることも大学博物館としての役割ではないだろうか。この点については展示の現状の評価とは乖離してしまうので今後の展示計画の課題としておき、現在の展示は単なる陳列に近いことは指摘しておかねばならない。

展示のねらいの第4点目、資料の提供、研究への寄与をいかに社会に伝達するかは、大学博物館の存在が注目されるようになった近年、頻繁に提唱されているものであり、現在の展示計画の際にはあまり重視されていなかったようである。しかし展示配置図（9）の動物の毛の変異・分類に北大農学研究科近藤教授の協力を得て写真を展示するなど大学における研究状況の一部を提示していることは来館者にも伝わっているものと思われる。今後、それらの研究がいかに社会に還元されているかをよりわかりやすく解説する必要があるが、その協力体制¹²はスタートしたばかりであり、その手法も今後更に開発されてゆくものであろう。

展示解説全般を見た場合、動物学資料に関しては和名と学名、分布域について全て記載してあり¹³、学術資料としての位置付けは明確になされている。しかし英名・学名についての基本的な説明が無いなど、“理解できる人”を対象に展示が行われているという印象は拭えない。動物学や北海道の歴史に関心のない来館者であれば珍しいものを見た、という感想だけで再訪する価値は見出せないのではないだろうか。

これらの問題点は、「札幌博物館ハ北海道所産ノ動植物及ヒ之ニヨツテ製出スル工藝品ヲ蒐集スル事又開拓殖民ノ為メ裨益アル物品即農業、漁業、山林ノ諸産物及其製品并供用物品等ヲ陳列シ、陸水二産増殖ノ模範タラシムル」（明治15年）¹⁴、「本場ハ北海道所産ノ動植物等ノ学術ニ裨益アルモノヲ蒐集陳列シ以テ学生研究ノ便ニ供ス」（明治21年）¹⁵、「本道に來遊する者をして特殊ある本道の天然物の形状を窺ひ知らしむる」（明治43年）¹⁶ために陳列しているという博物館設立当初の体質が現在に引き継がれているためともいえよう。しかし、“明治時代の博物館”として博物館そのものを展示するならばともかく、現在も博物館として機能している以上、現代の博物館の機能を果たす方向で活動をしてゆくことが求められる。

4 博物館北方民族資料室展示・解説の評価

北海道大学農学部博物館北方民族資料室における展示のねらいはどこにあるのだろうか。展示のねらいを示しているリーフレットには「古くから北海道、樺太（サハリン）、千島列島（クリル諸島）などの広大な地域で生活を営んできたアイヌ民族やサハリン先住民ニヴフ（ギリヤーク）、ウイльта（オロッコ）の生活・文化にかかわる実物資料を展示」しており、「明治から昭和初期にかけて収集した

もので、学術的に貴重な資料が多数含まれて」と記されており、以上のことを伝えるための展示と解釈してよからう。資料室の歴史を紐解いてみると、開拓使が収集した資料の多くは「勸業的色彩の濃い『工芸品』」¹⁷、「全道土人ノ曾テ使用シタルモノ及ヒ現今所用ノ物品ヲ蒐集シテ史傳ノ考徴ニ供スル事」(明治15年)¹⁸、「本道所産ノ動、植、鉱及本道『アイヌ』人ノ製造ニ関スル各種ノ諸器物ヲ蒐集シ以テ学生研究上ノ用ニ供スルヲ以テ目的トス」(明治30年)¹⁹、名取武光らによる民族学資料としての取り扱い²⁰、という流れがある。しかしこれらは北方民族資料をどのように見ていたかという視点であり、「展示」という一般公開の面でどのように扱われていたかの情報として考えることはできない。博物館の発行した唯一の展示品目録である「札幌博物館案内」(明治43年)を見てみると、アイヌ資料は「人類学標本類」として展示され、1.家屋其他建物、2.衣服及附属品、3.日用器具及楽器、4.漁猟具及武具、5.工芸具及工芸品、6.宗教的用品、7.熊祭式場という構成であったことがわかる。「札幌博物館案内」を見る限りでは各資料の解説がなされているにとどまり、これらがどのように関連付けられていたのかは読み取ることができない。

現在の展示分類は、明治43年に博物館本館2階で展示していた頃とほぼ同じであり、資料の情報以外に解説用のパネル・テキスト類は全く設置されていない。これは先に見た「本道所産ノ動、植、鉱及本道『アイヌ』人ノ製造ニ関スル各種ノ諸器物ヲ蒐集シ以テ学生研究上ノ用ニ供スルヲ以テ目的トス」という古くからの資料の利用目的と何ら変わるところがなく、一般の来館者に対しての学習への導きなどは配慮されないまま、展示されつづけていたものといえるのではないだろうか。

それでは、現在の展示を通じて本報告の対象とした来館者は何を読み取ることができるのだろうか。以下は、北方民族資料室前に設置したノートに記された来館者の意見である。

「アイヌの人って原始人と変わらないような…²¹」「熊祭りの映像はショックでした²²」「熊のビデオを見て民族に対する偏見が生まれてしまうような気がしました。もっと色々な角度からその儀式について説明してもらわないと、ただ野蛮な人たちに正直言っとうつりました²³」

アイヌの精神文化の解説がないまま熊送りの映像を見たならば「残酷」とであるという感想を持つことは十分に予想できるし、アイヌ民族の現在についての知識がなければ、博物館にしか存在しない民族という誤解をも引き起こしかねない。まして展示されている資料は、アイヌ文化を否定した和人による北海道開拓期、および「滅びつつある」文化の保存、研究と考えられていた犬飼哲夫²⁴館長期に収集されたという背景があり、この点についての解説がなければ現代に生きる人々に対してアイヌ文化をゆがんだ形で伝えてしまう恐れがある。山田尚彦氏²⁵や佐々木亨氏²⁶が述べるように、「誤読する自由」というものは展示において重要な要素であると考え、道外からの観光客という来館者に、基本的な知識や考え方を提供しないまま自由に理解してもらうことはあまりにも無理がある。

「(北方民族の)生活・文化にかかわる実物資料を展示」というねらいは、「展示すること」が目的であるならば達成できているといえるかもしれないが、教育・研究の成果を展示する博物館の展示として、「生活・文化にかかわる」ものであることを理解させるためには、その解説・情報が不足していると言わざるをえない²⁷。ただし、単純に解説を増やせばよいという姿勢も検討しなければならない。「熊祭りのビデオにショックを受けました。この機会に本など読んでみたいです²⁸」など、関心の方向が受動的ではなく、能動的な方向へと変化したことを窺わせる意見などもある。教育機関でもあり、学習の場でもある博物館(特に大学博物館)にとって、パネルのような一方通行の伝達というのは必ずしもふさわしい手段ではなく、自主的に学ぶ、共に学ぶという姿勢を前面に出すことも重要なことではないだろうか。展示スペースの狭隘さにともなう解説スペースの確保が困難である以上、図書室・学習室などの付属設備をあわせた解説・展示表現方法の開発が望まれるが、当博物館にはそのような設備そのものが存在しない。今後の充実が望まれる。

民族資料に学名を付与することはないが、北方民族資料室の展示資料には把握しうる限りで作製・使用した民族の表現に基づく名称を併記してある。しかしこれも博物館本館展示の学名と同様にそれがもつ意味を知らなければ単なる文字の羅列にしか過ぎない。大学による研究の蓄積、資料とそれに伴う情報の保存の成果を社会に理解できるように解説してこそ、学術標本として資料を展示する意味

があるものとする。

小括

以上、博物館・北方民族資料室の各展示・解説について現在の来館者層の特徴に基づいて検討を進めてきた。今回は来館者層の調査・検討と意見ノートに基づくものであり、彼らが展示を見て、実際の程度理解できたのかについてはまったく調査を行ってはいない。佐々木亨氏²⁹が考察されているように、展示がどのように伝わっているのか、"特に概念的な部分"がどれだけ伝わっているかを調査することは非常に困難である。今回の評価が妥当なものであるのかは今後の博物館の展示替、解説の設置以降の反応を確認するほかないが、現在植物園に所属する学生の中には来園者の動線調査を行う者もあり、彼らと協力して個別アンケートなどを実施してさらに検討を重ねてゆくことも可能であろう。今後の課題としたい。

5 北大植物園温室における来園者層調査報告

5.1 調査方法

〈調査場所〉北海道大学農学部附属植物園 温室 1F ホール

〈調査期間〉平成 12 年 12 月 1 日～平成 13 年 2 月 28 日

・北大植物園では 4 月 29 日（みどりの日）から 11 月 3 日（文化の日）までを夏季営業期間として温室の他に、屋外の庭園部や園内に存する博物館、北方民族資料室、宮部金吾記念館を開放しているが、調査期間を含む 11 月 4 日から 4 月 28 日までの冬季営業期間中は、これらの施設を閉鎖し温室およびラン・多肉植物室のみを開放している。

・平成 13 年 2 月 6 日から 10 日までの 5 日間は、「第 52 回さっぽろ雪まつり」期間中の営業日であることから、主に本州方面からの旅行者の急増が見込まれる。これに伴い通常営業時とは客層が大きく異なることも予想されるためこの 5 日間を調査期間の対象から除いた。なお、この「さっぽろ雪まつり」期間中における来館者層調査は持田からの報告³⁰を参考にされたい。

〈調査対象〉北大植物園温室への一般来館者

〈調査方法〉温室ホール設置の来館者休憩用テーブルにアンケート用紙を設置し入館者の自由意志に任せてチェックしてもらう。

〈調査項目〉性別・年齢層・居住地・来館回数・来館目的の 5 項目。博物館における来園者層調査の項目に準じた。

〈調査における問題点〉

博物館における来園者層調査と同様の問題点が見受けられ、これに準ずる集計操作を行なった。

5.2 調査結果および考察

5.2.1 来館者数と回答者数

来館者の数に対する回答者の数は調査月別にみても 5 割前後に達した（表 4）。ゆえに来館者のおおよそ 2 人に 1 人がアンケートに回答したといえる。アンケートを設置した温室ホールは、券売機や受付が設置された来館者が必ず通過する場所であり、天候等に左右されないため調査場所としては適切であったと考えられる。しかし休憩用テーブルに座らなければアンケート用紙が目に入らない事が予想され、温室およびラン・多肉植物室見学後休憩を取らずに退館した来館者の回答は、得られなかった可能性がある。

表 4 入館者数と回答数

	調査日数	来館者数	回答者数	回答率(%)
12 月	22	574	305	53.14
1 月	22	462	209	45.24
2 月	18	516	212	41.09
総計	62	1552	726	46.78

5・2・2 男女比 (図 11・12)

来館者における男女の比率は、女性が5割以上を占め男性を上回った(図 11)。調査月別にみても同様の傾向がみられ(図 12)、調査期間中に大きな変化はないといえる。

5・2・3 年齢構成 (図 13・14)

年齢区分は博物館における来園者層調査に準じて区分した(表 3 参照)。この結果、来園者の中心は 41～60 才の E 層で、次いで 26～40 才の D 層、そして 19～25 才の C 層と続いた(図 13)。

調査月別では、全体を通して E 層(41～60 才)が 35%前後、これに次いで D 層(26～40 才)が 25%前後と大きく変化しなかったのに対して、C 層(19～25 才)は 1 月に大きな減少を見せるが 2 月に急激に増加した。また C 層とは逆に、F 層(60 才～)は 1 月に増加して 2 月に減少するという変化を見せた(図 14)。

【12 月】

ほぼ平均的な傾向を示した。12 月末には学校、企業等で冬休みに入るが、北大植物園も 12 月 28 日から年末年始の休業に入るために、数字には反映されなかったと考えられる。

【1 月】

C 層(19～25 才)が大きく減少するのに相反して F 層(60 才～)が増加するため、C 層と F 層とが逆転する。北大植物園は 1 月 5 日から営業を開始しているが、F 層の増加は、時間に余裕がある高齢層が年末年始や雪まつりの混雑を避けて動いた可能性があげられる。

【2 月】

1 月で減少した C 層(19～25 才)が大きく増加に転じ、F 層(60 才～)が減少して C 層と D 層の順位は元に戻る。また、前 2 ヶ月はほぼ同じ値で変化していた A 層(～10 才)と B 層(11～18 才)だが、2 月では A 層が減少に、B 層が増加に転じた。C 層の増加理由として、学生の卒業旅行シーズンによる影響が考えられる。また C 層と D 層がともに増加した要因として、この 2 層が高校、大学の受験生を含んでおり、2 月から 3 月にかけて受験シーズンであることから、北大の受験あるいは北海道の高校、大学受験で札幌を訪れる機会のあった受験生が植物園に立ち寄った可能性が考えられる。この他に、2 月の調査期間からは「第 52 回さっぽろ雪まつり」期間中の営業日を除いているものの、この雪まつり期間に前後する形で札幌を訪れた旅行者による影響も少なくはないと考えられる。

5・2・4 居住地構成 (図 15・16)

全体の 6 割以上が道外からの来館者であることが明確に表れた(図 15)。旅行者と考えられる道内と道外および海外からの来館者は 8 割以上となり、逆に札幌市民による利用は 2 割以下という結果となった。調査月別においては、2 月の道外、海外居住者の増加が目

立つ（図 16）。前述のように卒業旅行や受験シーズン、雪まつり等の影響が考えられる。また 12 月における道外居住者の増加は、ホワイティルミネーション³¹の開催による影響も考えられる。

5・2・5 来館回数（図 17・18）

全体の 7 割以上が初めての来館であった。調査月別においては、初めて来館する割合が 2 月に増加しており、ここでも卒業旅行や受験シーズン、雪まつり等の影響と考えられる。また、12 月に 2～5 回目の来館者数がやや多いのは、市内からの来館者が若干多いことを受けての結果とも考えられる。

5・2・6 来館目的（図 19・20）

複数回答であるため回答者数に対する各項目の割合となっている。全体の約 7 割が観光目的という結果となり、年齢構成、居住地構成および来館回数での結果を裏付けている。また、観光に次いで温室、ラン・多肉植物室が目的にあがっているが、これは回答者の多くが展示スペースを全て見終わってからアンケートに回答したため温室とラン・多肉植物室を見学できたことに対して目的とした可能性が考えられる。というのも、道外からの観光目的の旅行者が大半を占める中で、5 割以上の来館者が熱帯や亜熱帯、乾燥地帯の植物を見ることを目的として温室またはラン・多肉植物室に来館したとは考えにくい。特にラン・多肉植物室においては、以前育成温室として使用していた非公開部分で、公開されるようになってから今季は 2 シーズン目にあたり、周知度も低いと思われる。よって、純粋にラン・多肉植物だけを目的とした来館者はごく僅かであると考えられる。

観光を目的とする来館者の中に、冬季営業期間中は庭園部や園内に存ずる博物館、北方民族資料室、宮部金吾記念館が閉鎖され、温室とラン・多肉植物室のみを開放しているという基本的な情報を持たずに来館している可能性が考えられる。その理由として、冬季間見学ができない閉鎖部分を目的にあげる来館者が 5% 以上（特に 2 月は 1 割近く）存在することがあげられる。このように植物園という漠然としたイメージだけを抱えて基本的な情報を持たずに来館した場合、結果的に見学が可能であった温室、ラン・多肉植物室を観光の目的に付け加えた可能性が想定される。

博物館における調査とほぼ同様の傾向を読み取ることができるが、夏季開園期間の調査も含め、継続して調査を行う予定である。

おわりに

近年各地の博物館施設において、来館者評価や展示の自己評価、来館者の意向を確認しながら開催される展示などが実施されているが、これらの活動は社会教育施設の役割が変化し、自らの存在の重要性を改めて認識しているため、あるいは危機を感じているためと考えられる。これらの自己評価・点検は現在のところ、ある程度規模の大きな博物館施設において実施されており、評価・点検を展示やそれに関する活動の改善に直結できないような小規模の施設において積極的に行われているとはいえない。しかし社会が当該施設に求めるものを把握し、それが各施設の活動と合致しているか否かを常に意識しておくことは、博物館施設の多くが税金によって運営されている以上必要なことであり、調査および評価が積極的に行われることが望まれる。

ただし、この調査および評価結果がどのように扱われるかについては注意しなくてはならない。社会のニーズに合致しないからといって縮小・廃止が進められたり、逆に求められることをそのまま実施したりすればよいというのではない。各施設にはそれぞれ独自の存在目的や活動目的があるはずである。"社会の要請であるから"という理由でそれらの目的を安易に転換したり、軽視したりすべきではなく、なぜ自らの存在目的と社会の要請が乖離しているのかを検討すべきであるし、自らの目的に沿った形で社会に対して貢献できないかという姿勢を維持することも重要であろう。時には自らの存在目的が妥当であるか見直しの必要に迫られるかもしれないが、博

博物館施設は100年、1000年先を見越した活動をすべきであって、その根本的な部分においては一時的な考え方に流されることなく活動する（させる）必要があることを忘れてはならない。つまり、来館者調査や展示評価というものは博物館施設がより発展するための一指標、手段であって、この結果のみが博物館そのものを評価するものではないことを社会が理解する必要があり、博物館施設はそれを理解させる責任がある。社会による理解がなければ博物館施設の積極的な自己評価は行われないであろうし、発展も望めないことをここに強調しておきたい。それと同時に博物館も、自己の存在目的を常に認識すること、柔軟かつ積極的な活動をおこなうこと、この両者は決して相反するものではなく、常にバランスをとって運営されなければならないこと、これらの点を自戒も込めてここに記しておく。

¹ 北海道大学農学部博物館が教育・研究にこれまでどれだけ力を注いできたかは検討する価値があるが、本稿の目的とは別の課題となるため、今後の課題としておきたい。

² なお、この評価は加藤及び長野の見解であって、植物園・博物館スタッフの総意ではないこと、またこの評価に従って展示内容を変更するという計画を持ったものではないことを付記しておく。

³ 4月29日回答数32名中男性10名、女性21名、不明1名になる。

⁴ 入園する男女の人数の差はそれほど大きくないという結果が出たが、窓口担当の事務官に問い合わせると入園者に占める女性の割合は非常に大きなものであるという。アンケートの数値と実態が異なる理由はどのようなものであろうか。まず、植物園に入園する女性の多くは5人前後のグループが多いという。先に見たように、同伴者が待つ場所があればアンケートに記入する数字が増加する。しかし、調査場所は大人数がゆっくりできる場所ではないため、グループで入館する場合、回答割合が低下するのであろうか。あるいは北方民族資料室が女性にとって魅力ある施設ではないのだろうか。調査の精度が不十分であることは明らかであるが、それを克服するための皆悉調査などは現時点では不可能である。よって今回の結果は来園者層調査ではなく、“北方民族資料室入室者のうち、植物園・博物館運営に関心がある”来園者層の調査といわざるをえないが、植物園・博物館にとってはこのような来館者層に対して、より積極的なアプローチが必要であるともいえよう。植物園には絵を描くために訪れる人々、写真撮影のために訪れる人々、昼食を取るための芝生を求めて訪れる人々などがある。このような人々にとって、展示や解説が重要と考える人はそれほど多くないものと思われる。“はじめに”でも述べたように、本報告では植物園・博物館の博物館的機能を求める来園者に対する園・館の評価を目的としており、アンケート記入者の回答を重視して評価を進めたい。

⁵ 男女比の際に問題としたアンケートに記入しない女性層もその多くがE層であることから、男女比ほど問題は大きいものにはならないと思われる。

⁶ 5月に来園した道内居住者の51%が2～7日の6日間に集中している。

⁷ 調査の問題点でも指摘したように、市内居住者は複数回来園しているため、北方民族資料室に入室しないことも予想される。入園者全体で調査をすれば結果に多少のずれは生じると思われるが、30%を超えることはないと思われる。

⁸ 各居住項目別で過去に来園経験のある人の割合を出すと、市内居住者（479名中168名、36%）、道内居住者（352名中85名、18%）、道外居住者（2069名中193名、9%）、海外居住者（202名中14名、7%）他居住地不明者2名となり、植物園近辺に住んでいる人ほど来園経験のある割合が多くなる。しかし、来園回数は他の項目に比べると不明者が多く、それほど信頼の置ける数値であるとはいえず、注記するにとどめる。

⁹ 調査場所の問題から、植物園の数値はおそらくもう少し高いものになるであろうし、北方民族資料室が博物館より高い数値を示しているのは調査場所である可能性もあり、評価の際には注意する必要がある。

¹⁰ 来園者の時期的変化に応じた展示替や解説の変更などはそもそも不可能であるが、夏休みに期間を限定した児童・生徒に対する学習意欲の喚起、支援の活動を検討する価値はあると思われる。

¹¹ 以下、括弧内の数字は展示配置の数字を示す。

¹² 平成12年度より北海道大学大学院文学研究科・農学研究科などの学生と協力し展示資料、研究支援資料・社会教育用の資料作製を開始している。

¹³ 改修工事以後に作成された手作りの解説キャプションには英名が記載されている。今後統一された様式に変更してゆく予定である。

¹⁴ 「札幌博物館ノ義ニ付伺」（北海道立文書館所蔵「札幌博物館書類」簿書番号7263号）。

¹⁵ 「札幌農学校一覽」自明治二十年至同二十一年。

¹⁶ 「札幌博物館案内」本館小史、1910年、札幌動物学雑誌会発行。

¹⁷ 沖野慎二「北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料(上)」(『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第5号、1999年)。

¹⁸ 前掲注(14)。なお、「土人」という表現は現在用いるべきではないが、本稿では資料語として用いている。

¹⁹ 「札幌農学校一覽」 従明治二十八年至明治三十年。

²⁰ 昭和5年に名取武光が博物館スタッフとして着任し、精力的にアイヌ資料の収集、研究を行った。名取武光による北方民族資料を用いた研究の成果は同氏著作集『アイヌと考古学(一)』『アイヌと考古学(二)』(北海道出版企画センター)などを参照されたい。

²¹ 平成11年8月24日記載。

²² 平成12年7月13日記載。

²³ 平成12年8月8日記載。

²⁴ 犬飼監修映像資料「アイヌの丸木舟」(北海道教育委員会、博物館標本番号33401)中でアイヌを“ほろびゆく民族”という表現が用いられている。なお、犬飼の下で研究を行っていた名取はアイヌとの交流が頻繁で、このような考え方を有していたとは考えにくい、現在のように社会全体が先住民族に対しての尊重、共生する民族として考えることの困難であった時代背景は無視できない。

²⁵ 「実践的展示批評に向けての試論—国立歴史民俗博物館企画展示「動物とのつきあい 食用から愛玩まで」—」、『民俗世界と博物館—展示・学習・研究のために—』、日本民俗学会編、1998年。

²⁶ 「博物館民族学とアイヌ民族文化展示の評価に関する考え方」『東北アジア研究』第4号、2000年。

²⁷ このような問題点は博物館としても認識しており、平成12年度よりアイヌ民族についての基本的な情報、北方民族資料室とその資料群の成り立ちなどについての解説ノートを展示室内に設置した。しかし来館者にアピールするには至っておらず、"アイヌとは何か"現在どれだけの人口なのか"という解説ノートに明記した情報を質問する来館者は後を絶たない。伝達方法としては適切なものではない可能性が高く、方法を模索している。

²⁸ 平成12年9月8日記載。

²⁹ 前掲注(26)。

³⁰ 持田誠『『札幌雪まつり』期間中における温室の利用者層とその反応』(『北海道大学農学部博物館研究紀要』第1号、2001年)。

³¹ 今季は平成12年11月17日から平成13年1月7日まで大通公園で開催された。雪のない道外からの旅行者に人気がある。

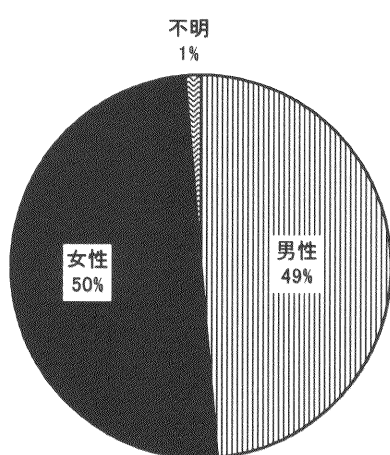


図1 男女比

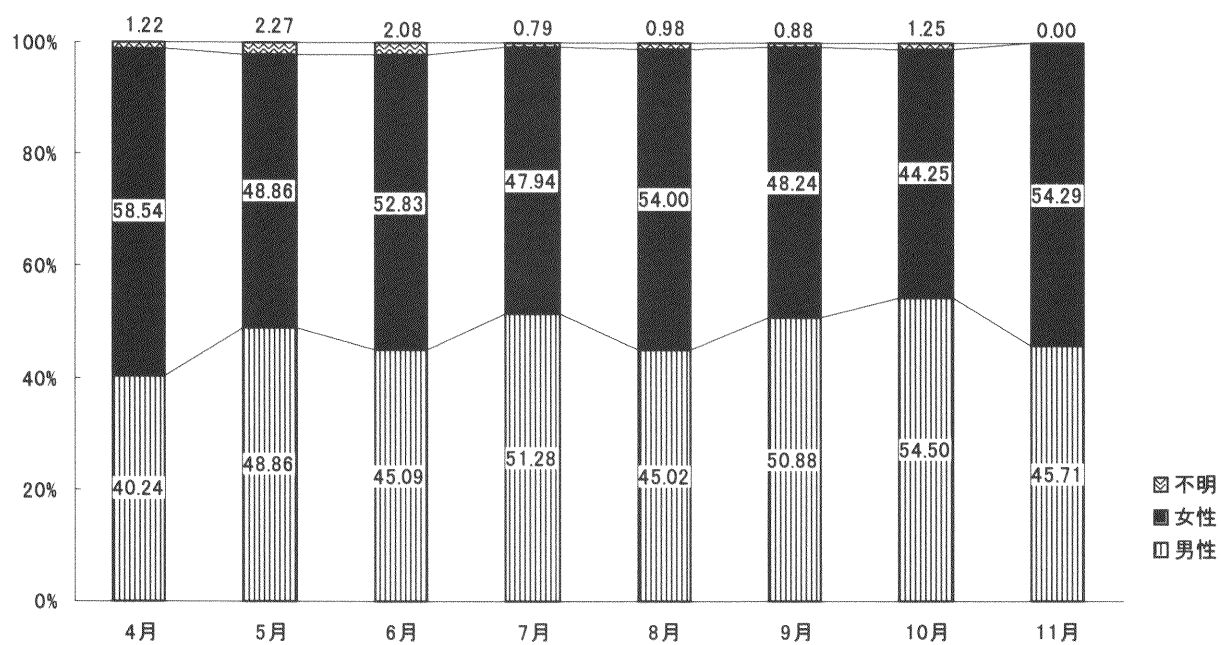


図2 月別男女比

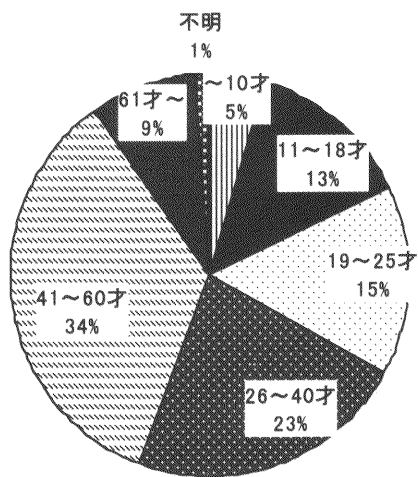


図3 年齢構成

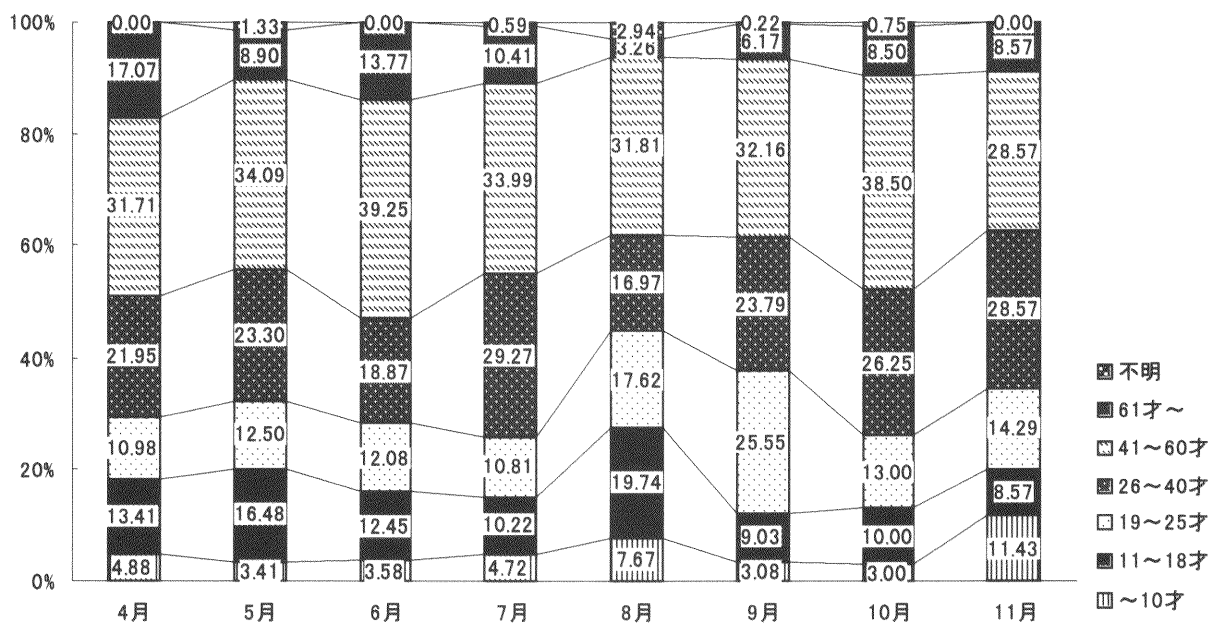


図4 月別年齢構成

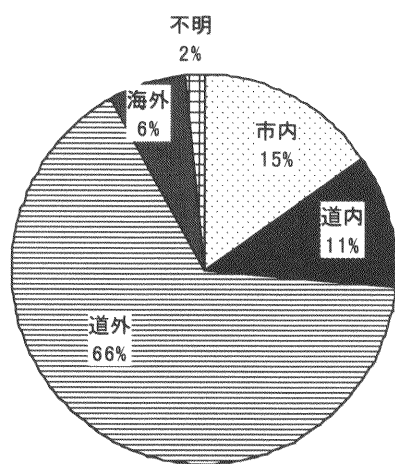


図5 居住地構成

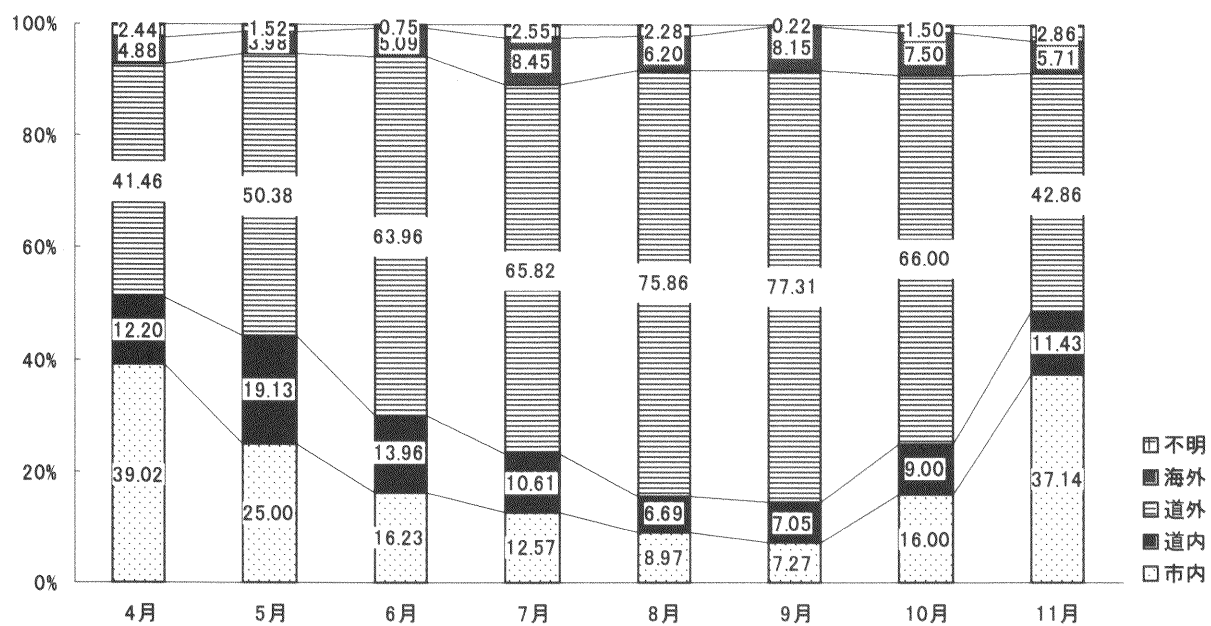


図6 月別居住地構成

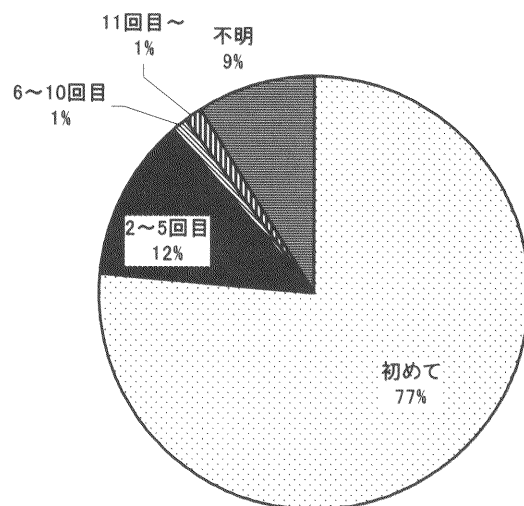


図7 来館回数

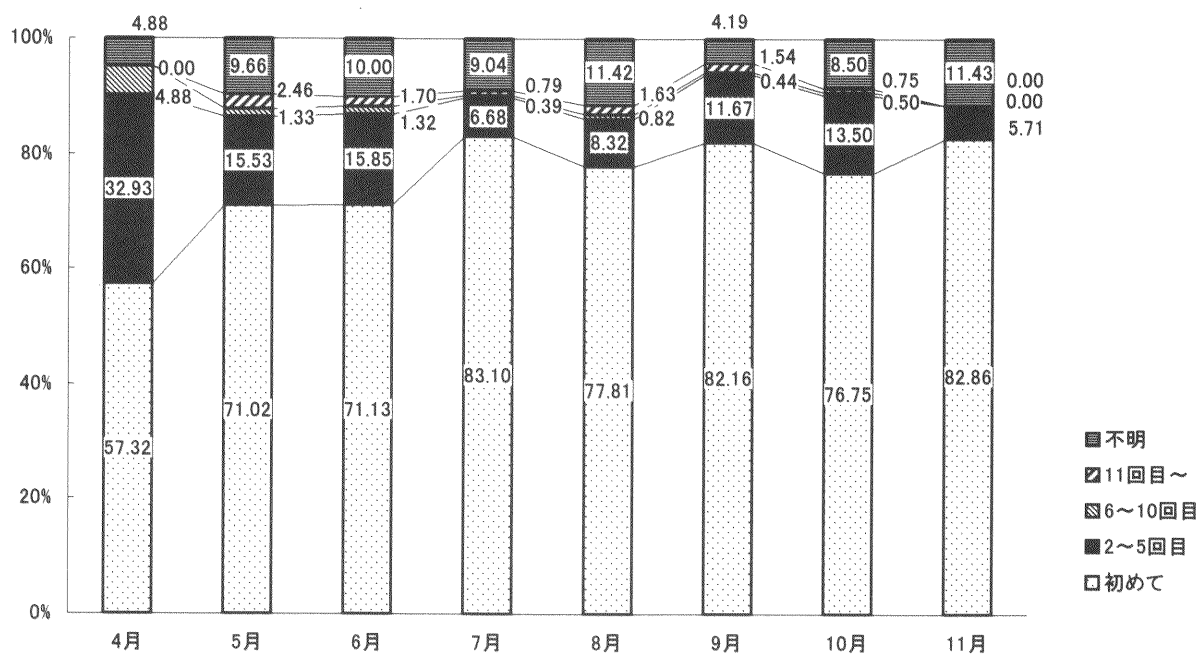


図8 月別来館回数

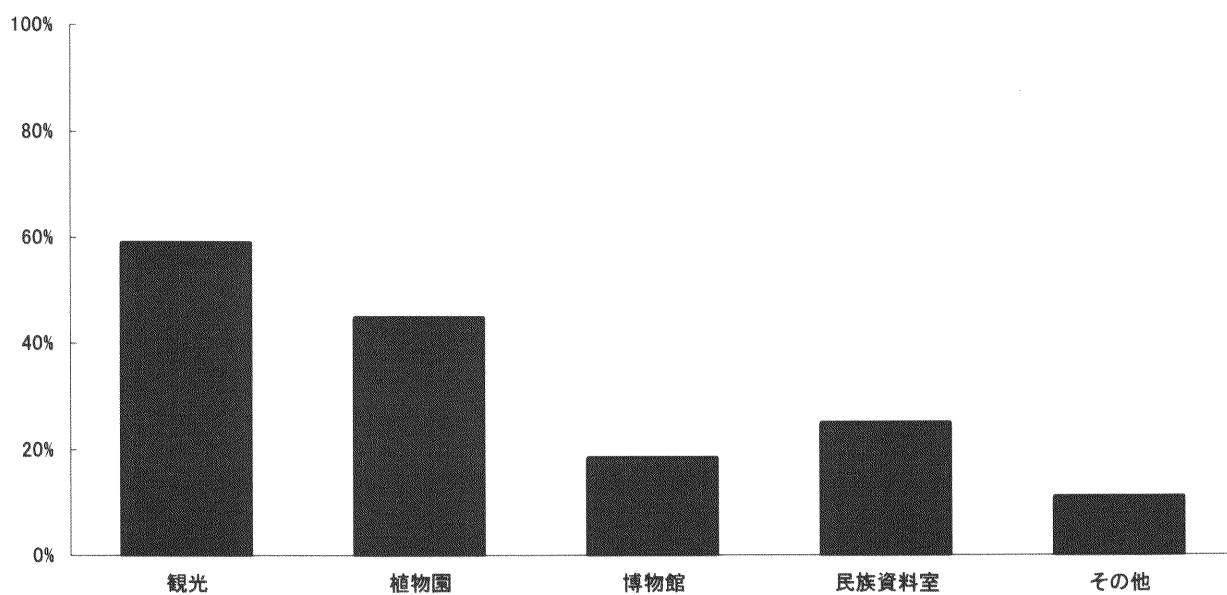


図9 来館目的

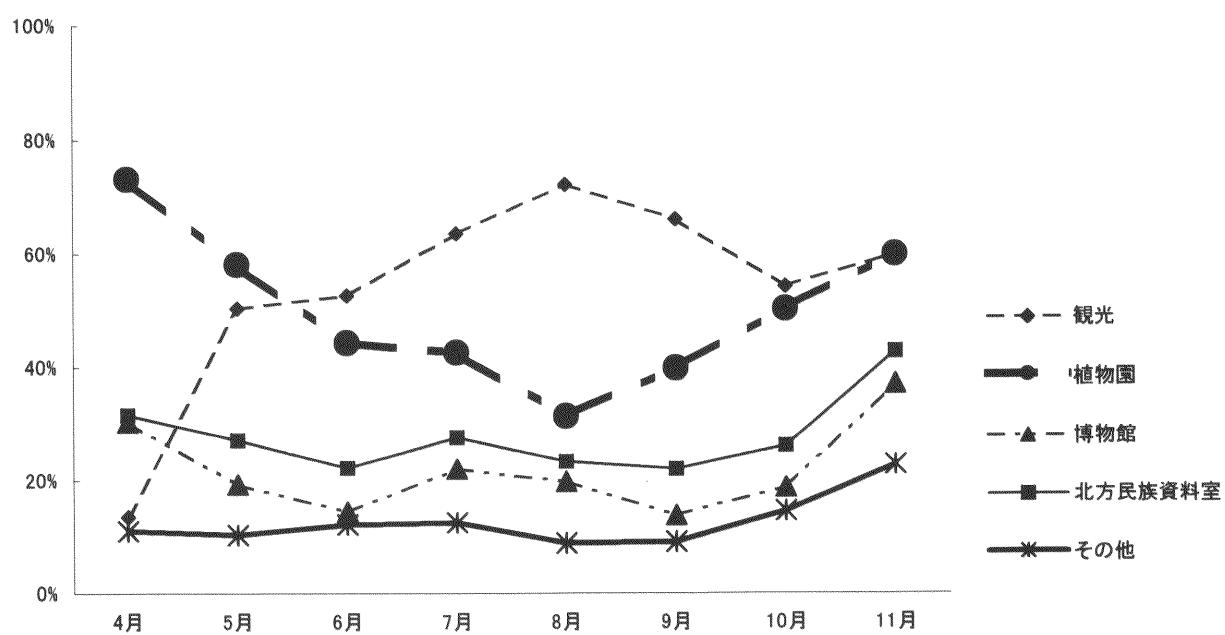


図10 月別来館目的

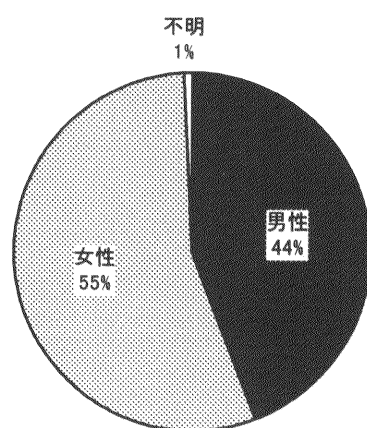


図 11 男女比

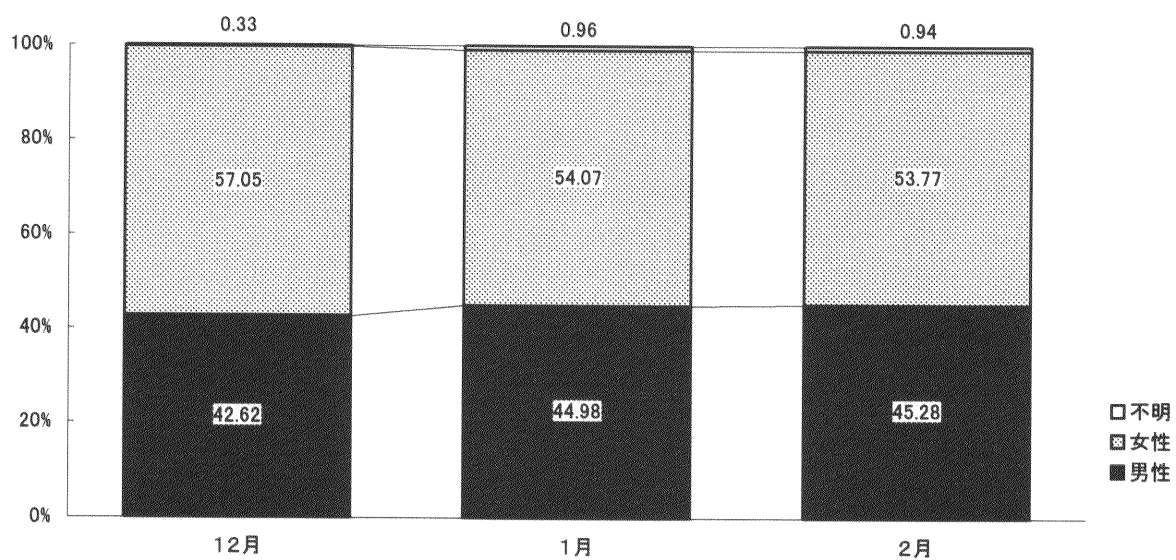


図 12 月別男女比

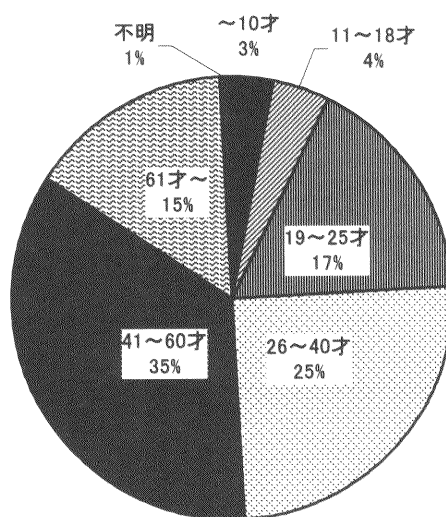


図 13 年齢構成

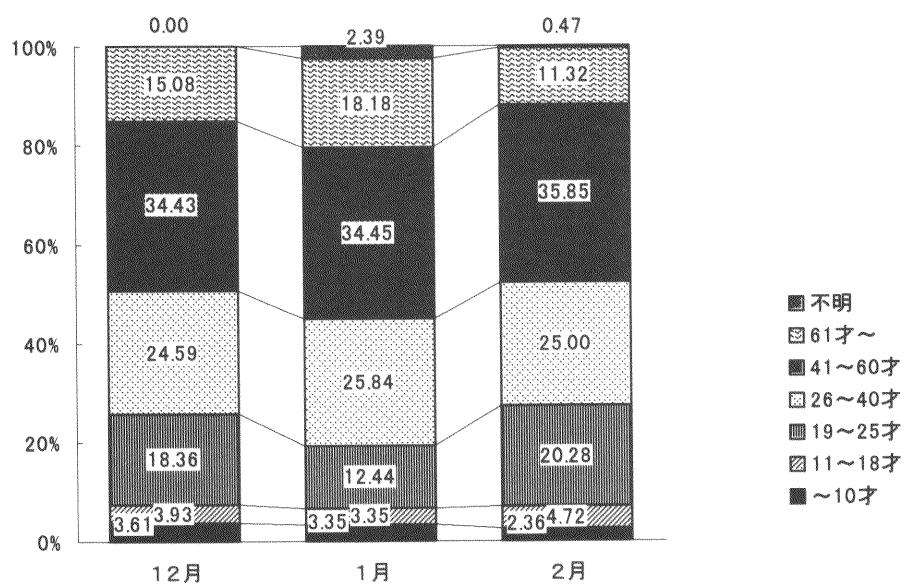


図 14 月別年齢構成

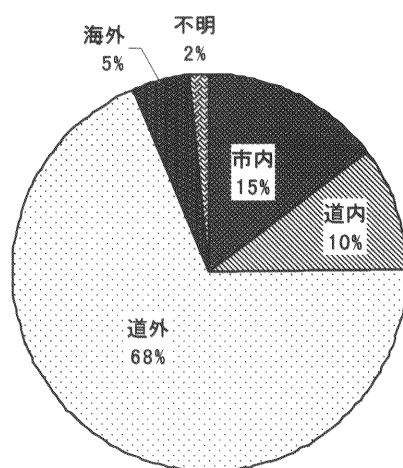


図 15 居住地構成

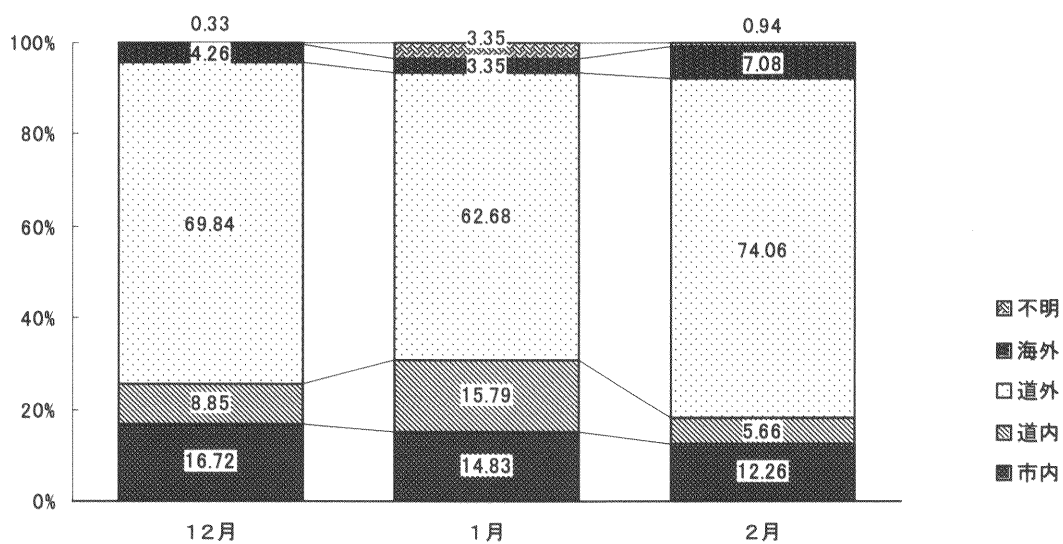


図 16 月別居住地構成

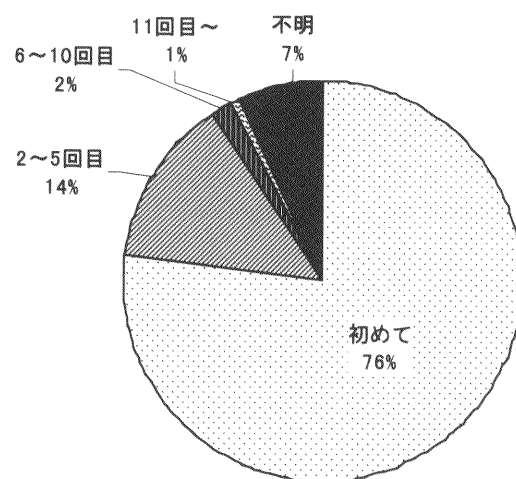


図 17 来館回数

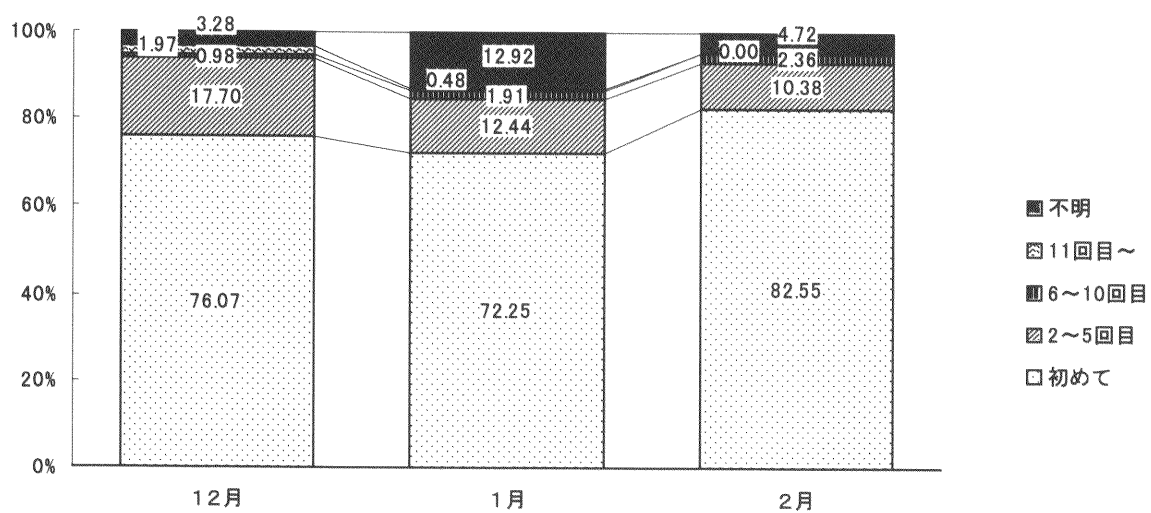


図 18 月別来館回数

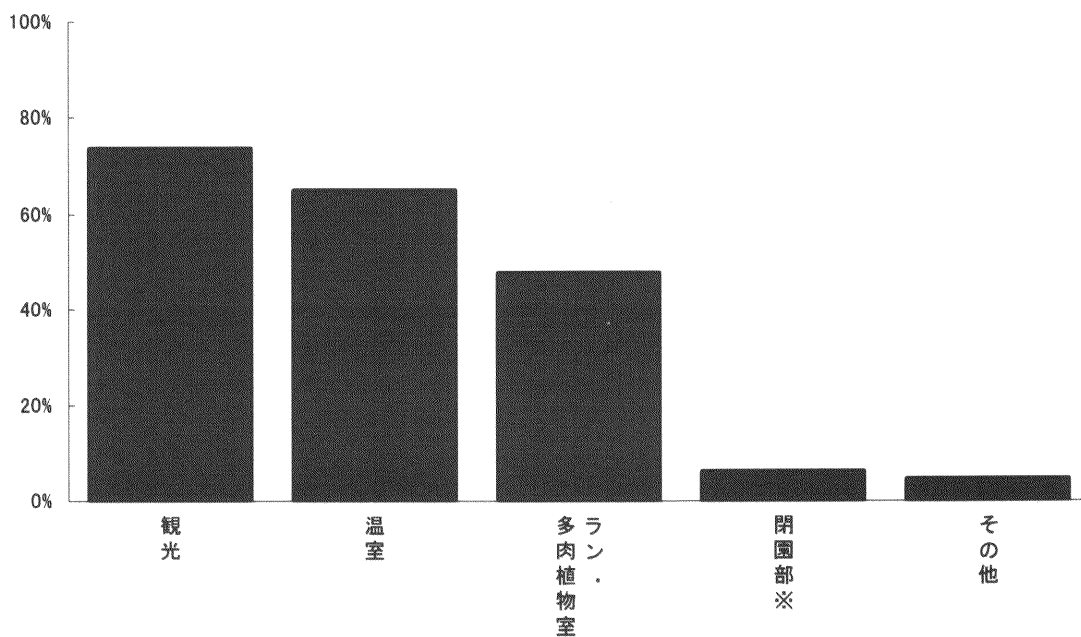


図 19 来館目的

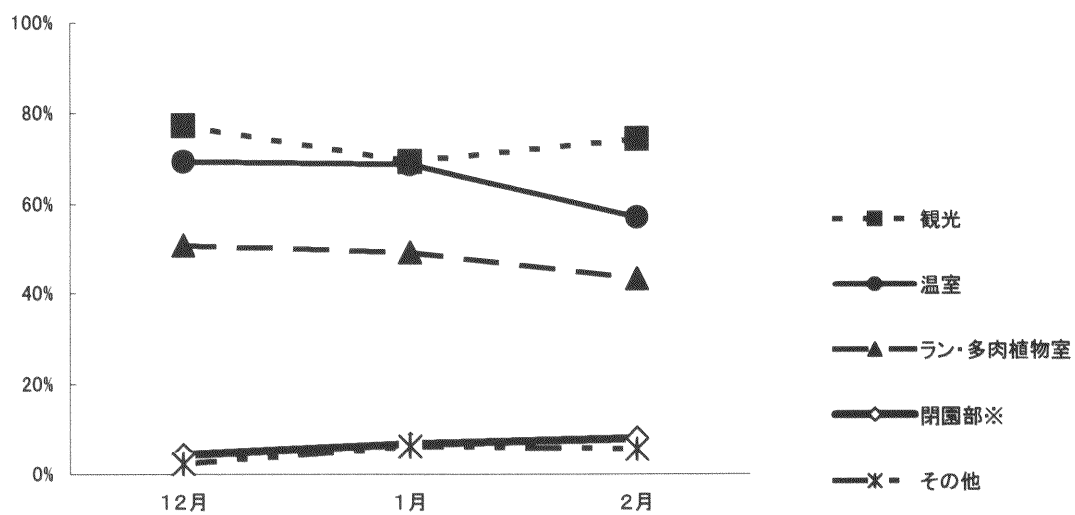


図 20 月別来館目的

※植物園・博物館・北方民族資料室

参考資料
博物館アンケート用紙

日付 Date	性別 Sex		年齢 Age				居住地 Residence		目的 Purpose				来館回数 Times of visit							
	男性 Male	女性 Female	～10	11-18	19-25	26-40	41-60	61～	市内	道内	海外	観光 Sightseeing	植物園 Botanical garden	博物館 Museum	民族資料室 Ainu Museum	その他 Other	1 First time	2～5	6～10	11～

植物園アンケート用紙
1行に一人分を記入してください。Please write your answer in one line.

例 1 2 3 4	日付 Date ex. 11/30	性別 (1つに○) Sex (Choose one)		年齢 Age						居住地 Residence			目的 (複数回答可) Purpose (You can choose some)					いままでの来館回数 How many times have you ever come here?			
		男性 Male	女性 Female	～10	11-18	19-25	26-40	41-60	61～	市内	道内	海外 Foreign	観光 Sightseeing	温室 Green house	ラン・多肉植物室 Orchid & Succulents	開園部※ Garden※	その他 Others	1 First time	2～5	6～10	11～